

理論の党派性について梯氏に

加藤 正

『これに対する批判や質問には必ず詳細にお答えする用意をもっている』というお約束によって、私は拙稿に与えられた梯明秀氏の批判（本誌第八号一〇〇頁）にお答えする——だが簡単に。というのは党派性の問題に関する詳細な分析を別稿として用意しつつあるから。

梯氏の批判の要点は、理論的思惟の主体は誰であるかと問い、それはプロレタリアートであると答える点にある。私は理論的思惟の主体などという奇妙な思想がどこから生まれたかを問うことはいましない積りである。これについては次稿で触れる。私はただ理論的思惟が認識主体なのだという点を梯氏が理解されることを望む。

一体事物をありのままに、それ自身の連関において把握する認識主体が、理論的思惟以外のものであるなどと考えるのは馬鹿げ切った想像だ。梯氏は恐らく現在理論的思惟を具有する人乃ないし至人々は誰であるかという問題を提出したいのであろう。だが三木氏の批判者梯氏は三木氏がかつてまさしくかかる問題設定から必然的に人間学的唯物論を導き出したことを御存知だろうか。

理論の政治的党派性の問題は、理論が階級もしくはその政治的党派の産物だという点にあるのではなく、理論が政治的党派の結合と闘争とを強めるために活動する点にある。これはただ理論が、階級を生み出した歴史的な全条件、それ等の条件の発展によるその階級の史的発展、その階級と他の階級及び社会層との連関をありの俚ままに分析し得た場合ままにのみ可能なのだ。そして機械論だとか、形式論理とか、先験論、観念論といったような、対象をありの俚ままに

分析し把握することの出来ないことが歴史的に証明されたような思惟方法の意識的無意識的輸入と闘争し、階級のありの俛まの認識を發展させることが、その階級の政党の結合と闘争を理論の側から強める唯一の途だ。

階級が生み出した理論であり、党派が生み出した理論であるという理由で、その理論の階級性及び党派性を云いわし、その階級その党派のために、他の理論に対してこの理論を擁ようごしなければならぬとしたら、そんな理論は宗教と扱あぶところはなない。

世界及び無産者階級のありの俛まの把握は決してこの階級の独占物ではない。梯氏は現在の物質的條件の下でと言っているが、これは何のことか。現在のように、単にリヨンだけでなく、世界のあらゆる隅々にまで階級闘争の波が荒れ狂っている物質的條件の下では、この階級の認識は自ら意識的に（つまり、無意識的だと認識できる恐れがあるので！）目をふさがない限り、思惟に忠実なすべての人にとって可能なのだ。

党派の任務は、階級とその行動の条件のありの俛まの認識を階級に齎もらし、この認識の下にこの階級を組織化する点にある。その際、この認識が誰の頭脳の中に生まれるかは問題でない。レーニンは『何をなすべきか』の中で社会民主主義（共産主義）的意識は階級の外から附与わせられなければならないと言った。階級を認識する思惟即ち認識主体は、首尾一貫的に忠実に思惟することを弁わえて頭脳があるところ何処にでもある。党派の任務はかかる認識を階級に結びつけることにある。そして階級の実践において証明されたる認識を、破壊的影響から擁ようごするにある。右のような意味で党派性を發揮すべき理論が、その本質において事物のありのままの把握でなければならぬというところが客観主義だろうか。

客観主義というのは、生産力が自然的に發展するにつれ階級がそれ自身で成熟し、世界を支配するようになるという政治的理論に与えた名称である。私は階級とその党派を發展せしめるための理論的契機として事物の連関をありのままに把握する限りでの認識主体——理論的意識——を擁ようごし發展せしめなければならぬと考えたのである。

弁証法的唯物論が、まさにこの点で独自性を保ち、他の如何なる意識とも相容れない性質を、私は弁証法的唯物論の理論上の党派性と呼んだのである。⁽¹⁾

私は事物の正しい認識が階級の立場に立つことによつて始めて可能だと言ひ、逆に正しい認識によつてのみ階級の立場を發展させ得るのだということを理解しない思想こそ恐るべき陰剣な客観主義だと考える。レーニンがその哲学的名著で、理論の党派性を唯物論か観念論かに求め、唯物論の中に唯物論以外の観念を齎もたらそうとするものに対して、鋭く唯物論としての党派性を擁擁ごしたのは味わうべきである。

理論の政治的党派性、即ち政党がそれによつて自己の行動の條件を意識し、自己を行動に導く政治的理論は、弁証法的唯物論の理論的党派性をどこまでも維持することによつてのみ齎もたらされるのだ。政治的党派の理論から、正しい認識が展開されるのではない。だが、諸階級の政治的党派的闘争と結びついている政治的理論については別稿でやや詳細に述べるつもりである。いまはただ次の疑問をもつて結末をつけよう。

弁証法的唯物論——自然、歴史及び意識の運動のありのままの把握——が維持され發展させられるのは、『科学の新しい発見』によつてであるか。それともプロレタリアートによつてであるか。理論的思惟に忠実な科学の研究家の諸成果に支持点があるのか。それともプロレタリアートの闘争にか。だが理論は経験の総括だとスターリンはレーニンニズムの有名な小冊子の中で言った。総括する理論的思惟がなければ——梯氏よプロレタリアートの貴重な闘争経験をすら弁証法的唯物論の宝庫の中に収めることが出来ないのだ。

- (1) 三枝氏は私を註の中で批判したから(本誌第八号二五頁)私も註の中で氏に答えよう。氏は私の要点を抜粋しただけで何等積極的なものを提示して居ない。だから一般に加藤正氏とあるところを、エンゲルス氏またはレーニン氏と直おしても意味が通るといふことに三枝氏は気がつかないものだろうか。私はプロレタリアートの党派性を完全に把握するのに失敗したのでなく、弁証法的唯物論の唯物論としての党派性だけを言っているのだ。何にもないところにものを認識するのは観念論の本質である。三枝氏は唯物論の中に「プロレタリアートの」党派性という主観的契機を割り込ませて、唯物論を『より完全に』把握しようという修正主義的傾向

に趨つているのでなければ幸である。私はエンゲルス及びレーニンの教に倣つて、かかる試みに対抗し、唯物論の唯物論としての首尾一貫性即ち理論的党派性を擁護しようとしているのに過ぎない。それこそがプロレタリアートの階級闘争の理論の政治的党派性を擁護する前提だということはこの次に！

六月十七日

（『唯物論研究』第一〇号、一九三三年八月）

- 『加藤正著作集』第一巻（「加藤正著作集」刊行委員会、一九八九年一二月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{d}^{\text{v}}\text{i}^{\text{p}}\text{d}^{\text{f}}\text{m}^{\text{x}}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.ac.uk/hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。